中葉シュンギクの系統比較試験

小川　光
（福島県園芸試験場）

Comparison Trial of Middle Leaf Type Garland Chrysanthemum Lines

Hikaru OGAWA
(Fukushima Horticultural Experiment Station)

はしがき

冬期間のパイプハウスの活用をはかるにあたって，最も作りやすい野菜の1つがシュンギクである。霜に直接当てない限り耐寒性は強く，又，冬期間の貴重なビタミンC源である。

問題点としては，気象条件等により価格が大きく変動すること，暖いと日持ちが悪く輸送性が劣り，逆に寒いと伸びが悪いこと等がある。又，ハウスの有効利用のためには抜き取りより摘み取りの方がよいが，側枝は軽い（1本約10g）割には摘み取りや袋詰めに労力がかかる欠点がある。このため主枝摘取り後は，側枝を地上5cm程度から刈取り，残った部分から出る二次側枝をまた刈取るという栽培も一部で行われている。このためには，茎葉があまり寝るものや，節間のあまり短いものは適さない。しかし，節間の長いものは葉の割合が少なく好まれない。

現在市販されている種子の多くは雑ぱくであり，収量の少ないもの，収穫に不便なもの等を含んでいる。本試験では，市販種子の系統比較の他，選抜の効果と市販の固定系との比較を通じての育種の方向性をさぐってみた。

試験方法

1. 比較系統名：51年度　石塚種苗，日東農産，渡辺採種場，協和種苗，武蔵野種苗奈良系，同中株張，タキイ種苗，坂田種苗，大和農園，みかど育種農場，トキタ種苗竜舞。

52年度，日東農産，トキタ種苗竜舞，I，N，S，Y（いずれも当場選抜）

2. 耕種概要：

51年度　播種9月17日，定植10月18日，ハウス被覆10月20日，小トンネル，ホカホカマット被覆10月28日から

52年度　播種9月21日，定植10月20日，ハウス被覆11月1日，小トンネル，ホカホカマット被覆11月21日から

パイプハウス間口4.5m，ベッド幅90cm，3ベッド，条間株間各15cm，1ベッド5条植

収穫方法は，原則として主枝は6葉，側枝は2葉残して摘み取る。

成績

51年度

1. 草姿では，ブロック及び個体差があり明確な差が認められなかったが，節間伸長型と思われた品種は，奈良系，みかど育種，次いで中株張であった。主枝の伸びが遅く，節間の短い株張型になると思われたのは竜舞。その他については区別できなかった。

2. 定植後30日程度で主枝収穫になったが，節間伸長型がやや収穫期が早まった。主枝収穫後10日程度で側枝収穫になった。厳寒期は伸びが悪く，30日以上かかり，収量も少なかった。総収量で多かったのは，石塚種苗，日東農産，大和農園，竜舞，協和種苗，渡辺採種場，タキイ種苗であった。坂田種苗は，2月下旬以降，収穫本数が少なく収量が落ちた。収穫本数は竜舞，大和農園が多く，坂田種苗，協和種苗は重く，竜舞，タキイ種苗，大和農園，中株張が軽かった。

52年度

1. 草姿では，個体差があり明確ではないが，Yは極端に節間が短く，Iは全体に丸味を帯び，Nは葉の茎に対する着生が鋭角で箒状になり，Sは節間が短く横張生であった。

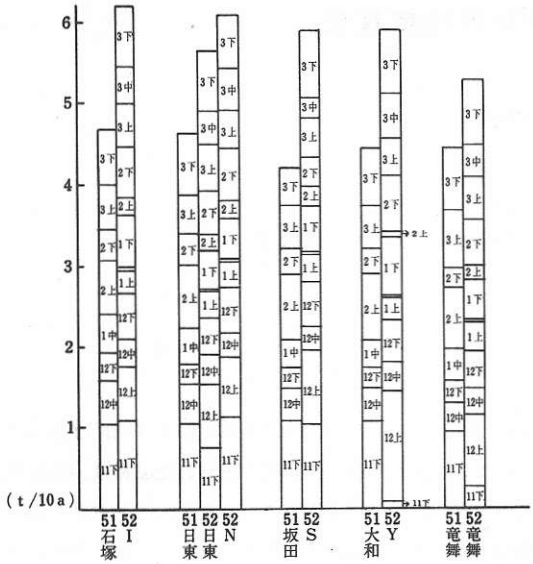
2. 総収量では，I，Nが多く，いずれも6t/10aを超えた。冬場の収量はSが多かった。1本重ではSが重く，竜舞が軽かった。

3. 葉の型及び色では，竜舞が切込み深く濃緑でテリがあり，Yは切込みが細かく，帯青色で，Iはやや黄味を帯び，Nはやや細葉でツヤがあり，Sは大きくて厚くやや灰緑色で切れこみは中位，日東は雑ぱくであった。

4. 抽台はS及びYが若干早いようであった。

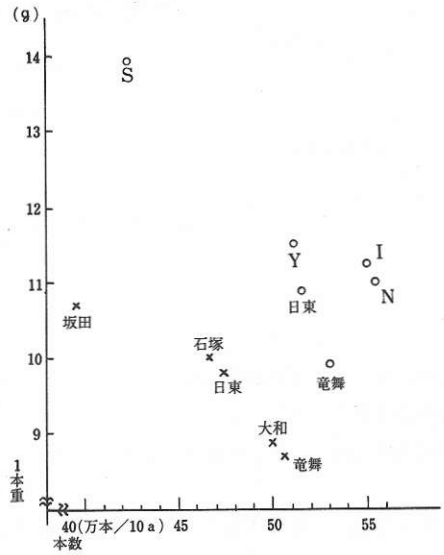
5. Nは前年度の日東から選抜したものであり，日東と比べ収量等で優れていたことから，選抜の効果があったと思われる。

なお，53年度より，育種に移して，I，N，Sを素材として刈取りに向く品種を育成中である。



$\frac{52年収量}{51年収量}$が $\frac{52日東}{51日東}$, $\frac{52竜舞}{51竜舞}$ のみ低いことがわかる。

図1　年次別収量比較試験



× 51年度　I，Nは本数を増す方向に
○ 52年度　S，Yは1本重を　〃　} 選抜した結果になった。

図2　系統選抜試験